



星川だより

熊谷空襲を忘れない市民の会 会報



特集 「戦跡めぐりをして」

～78年前の街の傷跡から未来を考える～



8月12日開催したパネルディスカッション

未来の平和な世界のために
齋藤可奈

八月十二日に開催された「戦跡めぐりをして」78年前の街の傷跡から未来を考える」で、パネラーを務めた齋藤可奈です。

私が発表した「ダークツーリズムとしての熊谷空襲」を聞いてくださった皆様ありがとうございます。私は現在、駒澤大学の文学部歴史学科に在籍しており、戦時中の防空法について勉強しています。今回、「星川だより」に寄稿する機会をいただきましたので、私が熊谷空襲を研究した高校生の時の話と、ダークツーリズムの意義について話したいと思います。

私の母校熊谷西高校には、「総合的な探究の時間(総探)」という、生徒が興味のあることを自由に探究できる授業があります。私は歴史に興味があったので、地元の歴史について探求しようと思ひ、小学生の時、熊谷空襲は日本で最後の空襲の一つであると学んだこと思い出し、ほかの地域の空襲をもとに、対策が

できたのではないかと考え、その原因を解明するべく、熊谷空襲の研究を始めました。また、三歳の時に熊谷空襲を受けた祖母から話を聞いていたことも誘因となりました。高二の総探の授業は研究、高三では、高二の時の研究で論文を書く授業でした。論文を書くにあたって、指導してくださる先生を探し、そこで日本史の先生である恩師に出会いました。その過程で、研究を九州国立博物館主催の、全国高等学校歴史学フォーラムに応募することが決まりました。このフォーラムは、歴史や考古学が好きな高校生たちが研究の成果を発表する場です。

二〇二二年八月に、「全国高等学校歴史学フォーラム 2022」で「ダークツーリズムとして熊谷空襲」の研究を発表しました。そして「感情的に受け止めがちな空襲による被害を客観的にとらえた」とも良い発表でした。」と評価をいただきました。(引用九州国立博物館のホームページ)このフォーラムで発表できたことは、現在、大学で歴史の勉強をしている私につながるとても良い機会になりました。

「ダークツーリズム」という言葉をご存じでしょうか。戦争や災害、そして様々な死の現場といった悲劇の場に人々が訪れることです。熊谷空襲に置き換えると、中家堂の焦げてしまった石灯籠を見に行ったり、幹の中が焦げてしまったケヤキを見に石上寺を訪れたりすることです。私はこのダークツーリズムの一番の目的は、平和な世界を目指す

ために、戦争を「追体験」をすることだと思っています。

この追体験がなぜ必要なのかというと、人間は基本的に「体験」で学びを得ると考えているからです。例えば、勉強してもなかなかテストでよい点数を取れないのに、理科の実験や、自由研究、博物館に訪れて学んだ、テストに出るかわからない知識はずっと頭に残っています。「体験」は、人々に身体的な記憶ももたらすと思います。

戦争もそうです。原爆が日本に落とされたことを知っている外国の方が、広島平和記念資料館に訪れた後に肩を落としてインタビューを受けた彼らは、原爆の恐ろしさを知り、原爆の「追体験」をしたのです。彼らは戦争を嫌うでしょう。このように戦争の悲惨さを知ること、未来の人類は戦争から一歩遠ざかることができるのです。私はこのように考えています。先述した私の祖母は今年で八十一歳です。戦争体験者の話を直接聞くことができなくなる未来も遠くありません。未来の平和な世界のために我々ができることは何でしょうか。未来を担っていく世代が、戦争を「追体験」することができ、機会を用意することではないでしょうか。

夏が来た時には
坂本彩夏

高校三年間を過ごした熊谷に、八月十二日、パネルディスカッションに参加するため訪れた。やはり熊谷は暑かったが、その暑

ささえ高校時代を思い出し懐かしく感じた。私は高校二年生の時に、熊谷女子高校日本史部として「最後の空襲 熊谷」のインタビューに参加し、その縁があり今回のパネルディスカッションに参加することとなった。

私が高校二年生の時に、今回も参加されていた高城三郎さんにインタビューを行った。私たちの世代は、祖父母も戦中・戦後生まれが多く、戦争について家族から聞くことは少なくなっていることから、空襲や戦争についての質問の他に、当時の学校生活に関する質問も行った。例えば、私は英語を勉強することは無かったのではないかと思っていた。しかし、インタビューに答えた高城さんは「英語の授業があった」と仰っていて驚いた。また高城さんが熊女の教壇に立っていた時、自身の戦争体験について話をされなかったということもとても印象に残っている。私は高校を卒業後、大学で歴史学を学んでいる。戦争についての講義を受講し、事あるごとに高城さんのお話について考えた。「話す」ということは、戦争による苦しさを思い出すことでもあるのではないだろうか。私は、話し手の体験を語るその意志を汲み取ることが聞き手には求められると思う。

高校を卒業した後に、日本史部の生徒に戦争体験者にインタビューをした経験の話をするため熊谷を訪れた。日本史部に新たに入学してくれた生徒が沢山いて、とても嬉しかった。インタビュー前の事前準備やインタビュー中についての質問を受けて、答え

るなかで私自身も学びが深まったように感じた。私は都合が合わず、フィールドワークに参加することは出来なかつたので、在校生の事前学習に役に立つことが出来ていれば幸いである。パネルディスカッションでは、日本史部の活動やフィールドワークについてまとめた。日本史部は伝統のある部なので、その活動をより多くの人に報告することの出来た貴重な機会となった。高城さんも三年前と変わらない元気なお姿で、当時の体験を話されていた。

今回のパネルディスカッションのサブタイトルは、「七十八年前の街の傷跡から未来を考える」である。戦後七十八年を迎え、戦争を経験した人々は年々減少している。そのため、記憶を伝えることの難しさなど、新たな課題を現代日本は抱えている。そういった現状の中で、私たち若者にいったい何が出来ようかと、今回の企画に参加したこともあり、考えた。例えば今回のパネルディスカッションのような場に行くことや、戦争に関する授業を受けることも、戦争について考える機会になるのではないか。また、自分の住んでいる街にある戦争を伝える戦跡に目を向けることも、戦争を身近に捉えるきっかけになるだろう。私は、パネルディスカッションの帰り道に、熊谷の老舗菓子屋である中家堂の石灯籠を見に行った。駐車場にひっそりと佇む石灯籠は、変わりゆく街の中で空襲を伝えていた。

歴史を学ぶとは、様々な出来事を忘れずに、次の時代に繋げ、

物事から学び教訓として残すことと出来ないか、と考える。今現在も、世界情勢は緊迫し、不安を抱えている。決して当たり前ではない平和のためにも、私たちは歴史を学ぶ必要があると思う。熊谷空襲は夏に起きたが、夏は暑く、好きではない人が多い季節かもしれない。しかし蝉の音が聞こえたのなら、戦争について考える時間を作ろうと思う。夏は必ずやってくる。それは今も昔も変わらないからだ。最後に、インタビュアーやパネルディスカッションといった、様々な貴重な体験の機会を下さった熊谷空襲を忘れない市民の会の皆様に心より感謝申し上げる。

戦争について発信する

猪鼻桃寧



「熊谷の方を見たら、もう真っ赤です。血を流したように赤かった」(最後の空襲熊谷一8月14・15日戦禍の記憶と継承より)

そんな衝撃的なお話を聞いたのはもう3年前の2020年7月29日のこと。それまで私はこの熊谷の地に、日本最後の空襲が行われていたことを知りませんでした。熊谷空襲を忘れない市民の会の皆様のご協力のもと、高城様にインタビュアーをさせていただきました。当時の人々の暮らしや思い、空襲当日の惨状など貴重なお話を聞き出すことが出来ました。

また、高校卒業後の2020年に戦跡巡りのお話をいただき、参加させていただきました。三

年間通学していた熊谷に数多くの熊谷空襲の面影が残る建造物があることに驚愕しました。同時に実際に自分の目で戦跡を見て、当時ここで何が起ったのか説明を聞くことによつて、空襲の悲惨な情景が頭の中で思い浮かび、悲しみ、やりきれない思い、悔しさという感情が湧き出てきました。

嬉しいことに今回のパネルディスカッションにもお声掛けいただき、熊谷空襲について発表させていただきました。発表するにあたり改めて一から調べると、新たな気づきがあり、より理解を深めて臨むことができました。ずっと通っていた熊谷女子高校は全焼し、南門は当時の空襲を免れていたことや星川にある女神像は空襲により亡くなられた266名の名前が刻まれ、永く慰霊と平和を祈る灯として建てられたこと、星川では毎年犠牲になつた人々を慰めるため、8月16日に灯籠流しが行われていたことなど、一つ一つの戦跡に当時の人々のたくさんの思いが込められていたことなど発表を通じて、来て下さった方々に知っていただけたと感じます。

また私は、イベントの中で「被害者だけでなく加害者側の立場からも物事を見ること」、「熊谷だけでなく周囲の地域にも視野を広げて考えること」を学びました。戦争について多角的な視点で、様々な意見・状況を知つたうえで、もう一度戦争について、歴史について学びなおそうと考えました。

私は実際に戦争を体験した方

とお話したのが初めてで、インタビュアーや戦跡巡りを通してたくさんの衝撃をうけました。戦争を体験した方でしか分からない事実は、悲しいとも思います。しかし、パネルディスカッションという場をいただき、私たちの世代が戦争について皆様に発信することは何らかの意味は必ずあると思つています。まずは身近な人からありのまま伝えていき、過去にこの場所で悲惨な出来事があつたことを知ってもらいたいと感じています。私たちの住んでいる場所には、自分たちが知らないだけで当時を知る戦跡があります。そのような身近なところから戦争について考えるきっかけになつてくれたら嬉しいのです。家族や友人と戦争について話すことによつて、新たな話や気づきも出てくると思います。身近に戦争体験者がいない若い世代にどのように戦争を発信していくか問題になっている現在、多くの人たちが戦争のことが届くことを願つています。

最後に、私たち若い世代に熊谷空襲について知る機会を数多く提供してくださつたこと、高校卒業後もパネルディスカッションに参加し、そして「星川だより」に寄稿させていただく貴重な経験をさせていただいたこと、この場をお借りして熊谷空襲を忘れない市民の会の皆様に厚く御礼申し上げます。



大久保利次さんを悼んで



大久保利次さんが8月24日心臓発作により亡くなられました。亡くなった数日前に電話があり、「『最新期空襲・熊谷』を送つてくれませんか。皆さんに配つてしまひ、自分の分が無くなつてしまつたんです。」といういつもの深瀬としたお声でした。「これから森村誠一さんについてエッセイを書くので亡くなった日を教えてください。」とおっしゃっていました。寄居町の公民館で俳句を嗜み、丹念に新聞を読み、「また出ていましたね」とその都度電話をくださいました。お元気な声と急死されたことが頭の中で錯綜し、しばらく知らせの電話を受け入れることができませんでした。昨年は熊谷空襲の体験者として当会の夏のイベントにもパネラーとして参加していただいたばかりでした。

「赤紙で往き、白箱で還される」戦争の痛みを訴える利次さんの名句を添えて哀悼の意を捧げます。どうぞ安らかにおやすみください。(米田主美)

会計報告 (2023/7/22~8/31)

収入	32,200	円
支出	33,680	円
収支残高	69,367	円

編集委員 吉田庄一、小川美穂子、米田主美
連絡先 吉田庄一 (090-4957-9181)
メール imajn241@gmail.com
HP <http://www.peace-magaya.org/>